

日時 令和4年10月6日(木) 18:30~20:00

会議様式 オンライン会議(ZOOM)

1 活動報告

(1) 地域資源情報データベースシステムの導入について

御意見、質疑応答なし

(2) 呉市在宅医療・介護連携に関する相談支援窓口の設置について

・質疑応答

(石井委員長)

トラブルの相談だけでなく、サービスや仕組み等に関する相談をしてもいいのか。

(齋藤コーディネーター)

医療・介護連携に関する相談の他、独居高齢者への支援方法やサービスに関する相談もあり、相談ケースに応じた地域資源情報を提供している。

(3) 退院前カンファレンスのオンライン化の取組状況について

ア 端末貸出やサポートについて

医療・介護関係者に、HM ネットのテレビ会議システムの安全性と利便性を実感してもらいHM ネットの利用促進を図るため、貸出用パソコンを市内8か所の地域包括支援センターに1台ずつ配置し、関係機関に周知した。

イ 入退院支援の流れとポイントについて

・意見交換および質疑応答

(石井委員長)

入院時、転院時、退院時の情報共有が肝要である。医師はカンファレンスへの参加が難しい状況があるため、オンライン化に期待している。

(越部委員)

入院時にケアマネジャーが医療機関に情報提供する流れはできてきたように思うが、医療機関から入院連絡がない場合がある。連携を図るにあたり、医療機関からケアマネジャーへの入院連絡を周知徹底する流れを作るという理解でいいか。

(齋藤コーディネーター)

こうしなければならないというルールになると、それに縛られて業務に支障をきたすのではないか。関係者に共通認識として根付くようにしたいと考えている。

(越部委員)

入院時の連絡や情報共有は一番の課題ではないか。流れができるといいと思う。

(石井委員長)

急性期病院は入院後すぐに退院を見据えた支援が必要な場合もあり、流れができるといいと思う。

(折本委員)

退院前カンファレンスのオンライン化推進ワーキングで参考資料として提示された

と捉えている。このワーキングは各職種の代表で構成されている。また入退院支援について、医療ソーシャルワーカーが配置されていない病院や病棟看護師が行う病院もある。今後協議する場合は、医師会などと調整したうえで話し合いの場を作る必要があるのではないか。当院では、退院支援部門の職員が関われるのは全入院患者の約1割である。医療ソーシャルワーカーとの連携ではなく、病院と地域がいかにつながるかが重要なポイントではないか。

(齋藤コーディネーター)

医療機関の御意見を伺いたいという思いで参考資料とした。入退院支援の流れとポイントを共通認識とすることで、より連携が図れるのではないかと考えている。今後協議の場を設けて取り組んでいきたい。

(石井委員長)

実際に進めていくためには、医療機関や事業所の経営方針や実態に即した調整・検討が必要である。

(宮下委員)

地域包括支援センターには多くの相談が寄せられ、独居の方も支援している。本人がどこに行ったか分からないケースでは、地域連携室に問い合わせると情報提供してくれる。医療機関から地域包括支援センターへ照会もあり、情報提供している。関係機関と調整したうえで、共通認識をもって対応できるような体制が必要ではないか。

(田中高齢者支援課長)

様々な事業において、標準化することでそれぞれの職務の効率化を図り、利便性を高めるために取り組んでいる。標準化することに関しての御意見を伺いたい。

(折本委員)

病院によっては、人員配置の問題や退院支援を行う職種の違い、抱えているケースの数にも違いがあり、全病院で標準化することは厳しいと思う。退院支援を行うにあたり、医療・介護双方の共通項は何かを探ることはできるのではないか。

(石井委員長)

診療情報提供書やリハビリの報告書等の書式をアレンジできないか。

(向井委員)

肺がん患者で9日間外泊したケースでは、地域連携室や病院主治医から綿密な情報提供があり、無事に自宅に帰ることができた。当院ではケアマネジャーがアポなしで相談に来たり、ケアマネジャーに直接連絡することもあり、連携に関するハードルはないと感じている。開業医がハードルを下げる必要があるのではないか。標準化することは大事だと思うが、応用編があってもいい。

(宮下委員)

医療リスクが高い利用者が訪問看護やリハビリを利用する場合、ケアマネジャーは必ずかかりつけ医に留意点などを確認している。しかし、コミュニケーション力に個人差があり、医師との連携を疎かにしているケアマネジャーもいるため、医療・介護連携が図れるように取り組んでいるが課題も多い。

(横田委員)

全職種が情報共有することは大事だと思う。標準化について、一人薬剤師の場合は手が回らないのが現状であるが、退院前カンファレンスに声をかけていただきたい。

(里見委員)

病院から気管内挿管時の抜歯やケア、義歯作製などの依頼がある。一方向ではあるが情報提供もある。連絡がない病院もあるため共通化は必要だと思う。

(石井委員長)

様式の共通化は必要だが、標準化したものを医療機関や事業所に強制するのは問題ではないかとの意見が多かった。その点をよく検討して進めていただきたい。

(4) 地域版 EMIS 実装モデル事業の取組状況について

御意見、質疑応答なし

2 議題

(1) 在宅療養支援のための多職種連携研修会の開催

・質疑応答

(石井委員長)

開催回数はどのくらいを予定しているか。

(齋藤コーディネーター)

研修内容の多職種意見交換会は、2～3ヶ月に1回で定期開催したいと考えている。

(2) アドバンス・ケア・プランニングの地域住民への普及啓発について

・意見交換および質疑応答

(越部委員)

呉市と ACP 普及推進員との間で、今後の活動方針や活動内容の共有はあるのか。

(事務局前野)

現状はそこまで至っていない。活動報告に留まらず、連絡会を開催して今後の活動方針などについて検討したいと考えている。連絡会に関しての御意見を伺いたい。

(越部委員)

広島県では推進員フォローアップ研修の内容がアップされている。呉市でも ACP 普及推進員の活動内容や進捗状況が共有できるような仕組みがあればいいと思う。ACP 普及推進員の活動を知ること、今後の課題も見えやすくなるのではないかと。

(事務局前野)

ACP 普及推進員の現状把握を行い、今後の活動の方向性を検討していきたい。

(宮下委員)

地域住民へ普及啓発する場合、終末期の話題はハードルが高いため認知症サポーター養成講座の中で取り上げている。認知症と ACP を関連付けて話をする中で、ACP や人生の彩りノートを身近なものに感じることができ、理解も得られやすいのではないかと。ACP 単独で普及啓発するのではなく、様々なテーマと抱き合わせてはどうか。

(新谷委員)

病気になってから人生の彩りノートを書くのは難しい。健康な時から普及啓発することが必要ではないか。

(折本委員)

身寄りのない方が民生委員と人生の彩りノートをもとに本人の意思決定を共有してい

たケースでは、救急搬送時、本人の意思決定に沿った治療方針を決めることができた。本人の意思決定を病院につなぐことができたと感じた一方で、民生委員につながらなかった場合はどうなるのだろうか心配になった。急変時や救急搬送時に本人の意思決定を病院につなぐための共通ルールがあってもいいのではないか。

(石井委員長)

記入した人生の彩りノートは自宅のどこに置いてあるのか。具体的な使い方は。

(宮下委員)

記入はしたが家族にも言っていないという話をよく聞く。大事にしすぎてどこに置いたか分からないという方もいる。人生の彩りノートを記入した後、どう活用するかが課題である。

(上瀬委員)

救急搬送の現場で、人生の彩りノートを見たということを聞いたことはない。

(谷内田委員)

人生の彩りノートや ACP が地域住民に浸透しているように思う。コロナ禍で、家族と一緒に自宅で最期を迎えたいと退院する患者も増えた。人生の彩りノートについては、訪問時に記入した内容や具体的な活用方法などを確認している。訪問看護師が代弁者となって主治医に本人の意思決定を伝えているケースもある。普及啓発する側が渡して終わりではなく、一緒に確認していくことが大事であると思う。

3 その他

(1) 高齢者施設の入所者の意思決定支援の取組状況について

新型コロナウイルス感染症蔓延による医療逼迫に対してこそ、ACP の再確認や普及が必要ではないか。特に、高齢者施設の ACP の普及啓発における具体的な取組へ反映させるため、高齢者施設の意思決定支援の取組について、アンケート調査を行う。

・質疑応答

(新田委員)

新型コロナウイルス感染症に罹患した場合、施設療養が基本である。当施設では、日常生活に関する意思決定支援として本人や家族と事前面接を行い、ケアプランを作成している。次に最終段階に関する意思決定支援として、入所時に緊急連絡先、人工呼吸器装着や心臓マッサージに関する意向を確認し、入所時情報提供書を作成・活用することで病院との連携がスムーズにできている。ターミナル期においても家族に意向確認している。しかし、自分の意思を伝えられる方は約3割であり、こういった方への支援をどうするかが課題である。

(石井委員長)

コロナ禍による医療逼迫により、高齢者施設から搬送先が見つからなかった事例もあったと聞いた。実際、高齢者施設などのクラスター発生時の対応に苦慮した経験もある。

(2) 次回の日程について

令和5年1月～2月に開催予定

以上